

# 小児から成人へ AYA世代のがん看護

～思春期に焦点をあてて～

特集にあたって

## 思春期・若年成人世代の がん患者への支援に向けて

小児看護の特集として思春期・若年成人世代のがんを取り上げることを、やや奇異に思われる読者がいるかもしれない。

生涯発達段階からみると、思春期・若年成人世代はアイデンティティの模索の時期であり、一人ひとりが親とは異なる個性をもつ独特な存在である。現代の若者文化は多様で細分化されており、スポーツ、芸術(音楽・映画)、読書、ゲームなどの多様な文化を多様な方法で同世代の人々と共有し、誰一人として同じ特徴をもつ人はいない。思春期・若年成人世代のがんそのものも、非常に多様に富んでいる。この世代に発症するがんだけでなく、小児がん経験者の再発・二次がんや、家族性腫瘍の若年発症なども含まれる。

思春期・若年成人世代とは、生涯発達からみればごく短い期間に、進学・就職・結婚などのその後の人生を左右するような大きな意思決定を繰り返す時期である。自立をめざす多感な時代にごん治療を受けること、身体に変容をきたし、長期的な後遺障害を残すことの影響は計り知れない。

15歳以下の発症を中心とする小児がん医療と成人がん医療のはざまにあるこの世代のがん患者は、その特殊性や稀少性からさまざまな問題をかかえており、医療・治療の枠にとどまらないトータルケアを必要としている。

この世代のがん医療のもう一つの大きな問題は、小児から成人中心型医療への移行期にあるという点だけでなく、入院治療から外来治療へ、がん治療から長期

フォローアップへ、あるいはターミナルへというように、医療に関するニーズや場が一定せず、常に何らかの移行について支援が必要となることである。現状について、あえて厳しい言い方をすれば、複数の診療科による治療を受け、社会福祉サービスを利用し、教育・就労に関する調整を行っているのは患者本人とその家族であり、専門知識と技術をもってこのような困難な状況にある人々のトータルケアを担うチームの必要性が、ようやく認識されはじめたところといえる。

本特集では、思春期・若年成人世代のがん患者にとって、できるだけ共通性の高い問題を取り上げることとした。諸外国では、この世代のがん患者・サバイバーへのトータルケアの必要性が早くから認められ、さまざまな支援プログラムがそれぞれの国の医療状況や文化に即したかたちで発展しつつある。多くのプログラムは、思春期・若年成人世代のがん患者・サバイバーが発案したり、企画運営を行っている。新しい専門分野であるこの世代のがん医療には、新しい発想が必要であり、それは思春期・若年成人世代の人々そのものの強みではないかと感じている。執筆者に感謝申し上げるとともに、臨床でこの世代のケアに悩む看護師諸兄姉の知的・臨床的興味関心が、新しいトータルケアへとつながることを期待している。

甲南女子大学看護リハビリテーション学部  
看護学科国際看護開発学教授  
丸 光恵 Maru Mitsue